

時間的近接関係をあらわす接続機能語の分類

——「とたん」「瞬間」「やいなや」——

三 次 佑 果

[キーワード：①接続語 ②時間的間隔 ③とたん ④継起性 ⑤同時性]

1. 研究の目的

「家に着いたとたん電話が鳴った」と言われたとき、あなたなら家に着いて電話が鳴るまでをどのくらいの時間だと感じるだろうか。これが「着いた瞬間～」だったらどうであろうか。辞書には具体的な時間幅に関する記述はない。どのくらいと感じるかには個人差もあろう。これらと「着くやいなや～」には違いはあるのだろうか。言葉による相違が大きいであろうが、それは個人毎の相違を超えて一定なのであろうか。

本稿では、時間的近接関係を表す接続表現を扱う。時間的近接関係を表す接続表現とは、「前件と後件の出来事がほぼ同時に、あるいは引き続いて起こることを表す」（中里1998）ものである。例えば、「とたん」「瞬間」「すぐ（に）」「同時に」「まもなく」「やいなや」等である。紙幅の関係上、これらすべての時間的近接関係を表す接続表現を扱うことはできないため、さまざまな語形パターンが存在している「とたん」の用法を中心に考察し、また類義表現「瞬間」「やいなや」の用法と比較することで、時間的近接関係表現の体系的研究につなげていきたい。「とたん」（以下、トタン、と略す）は、例えば『教師と学習者のための日本語文型辞典』（以下『ジャマシイ』と略す）では、その用法を【V-たとたん（に）】【そのとたん（に）】【とたんにV】の3分類で解説している。その記述では「V-た、そのとたんに～」がどれに相当するのか不明である。その他の辞書を見ても、それぞれ独自の観点から分類を行っており、トタンのパターンの提示が統一されていないため、明確な用法が分からない（《表2》参照）。また、先行研究等でもさまざまな語形パターンが混在したまま、トタン以外の他の類義表現と比較しているのが実状である。そこで本稿では、まずトタンのパターンを整理し、それらを区別して扱っていくこととする。そしてそれぞれのパターンごとに用法を考察し、パターンごとの違いを見出してみたい。

次に、類義表現との比較として「瞬間」「やいなや」を取りあげる。これらに関する先行研究は詳しくは後述するが、いずれもトタンとの置き換えや意味の違いの議論が特

にさかに行われているものである。しかし、従来の比較ではテンス、アスペクトの違いや置き換えの可否検討に重点が置かれ、例えばそれぞれがトタンのどのパターンと近い意味を持つのか、どのように使い分けられているのかといった考察は不十分である。その問題点を踏まえて、それぞれの語のパターンを固定して比較し、それぞれの特徴や使われかたを検討していくことにしたい。

このような研究は、日本語教育の方面で盛んであるが、それらは単に用例を載せただけであったり簡単な説明で済ませていたりして必ずしも細部の相違が明確になっていない場合も多い。本稿では、用例を分析し、トタンとその類義表現との関係を中心にそれぞれがどのような特徴を持っているのか明らかにしていく。時間を表す語を体系的に把握することで、日本人が持っている時間に対する意識や時間感覚の特徴を把握できるだろう。

2. トタンの研究史

本稿では、トタン、「瞬間」、「やいなや」の3語を取りあげる。類義表現「瞬間」「やいなや」の選択理由と先行研究は後述する。ここでは、トタンの先行研究のみをまとめる。

『日本国語大辞典』（以下、『日国』と略す）では、トタンを以下のように記載している。

〔名〕①（「に」を伴うこともあり、多く副詞的に用いる）ほんの短い時間の経過を表わす。ちょうどその瞬間。はずみ。ひょうし。おり。また、ある事柄があつて、直ちに続いて別の事柄が起こるさま。

『日国』では、「瞬間」「はずみ」のようなやはり時間的近接関係をあらわす語と類義関係に置いており、「ほんの短い時間」や「直ちに続いて」と時間の速さを強調した書き方である。

その他日本語教育関係を中心にトタンの記述がある辞書、先行研究は以下のものがあり、本研究ではこれらを参考に考察を進めていくものとする。

- ①森田良行（1989）『基礎日本語辞典』角川書店
- ②森田良行・松木正恵（1989）『日本語表現文型』アルク
- ③飛田良文・浅田秀子（1994）『現代副詞用法辞典』東京堂出版
- ④友松悦子・宮本淳・和栗雅子（1996）『どんな時どう使う 日本語表現文型 500』アルク
- ⑤グループ・ジャマシイ（1998）『教師と学習者のための日本語文型辞典』くろしお出版
- ⑥中里理子（1998）「時間的近接関係を示す接続表現について―「やいなや」「とたんに」を中心に―」『学校法人佐藤栄学園埼玉短期大学研究紀要』7

- ⑦江雯薰（2000）「「～瞬間（ニ）」、「～途端（ニ）」、「～ヤ（否ヤ）」、「～ナリ」—その共通点と相違点について—」『岡山大学大学院文化科学研究科紀要』9
- ⑧中村重穂（2005）「「～なり」と「～たとたん」に関する一考察—意味論的観点から—」『北海道大学留学生センター紀要』9
- ⑨村木新次郎（2005）「〈とき〉をあらわす従属接続詞—「途端（に）」「拍子に」「やさき（に）」などを例として—」『同志社女子大学学術研究年報』56
- ⑩奥村大志（2006）「時を表す機能語—「たとたんに」「かと思うと」「やいなや」「～が～ないかのうちに」「が早いか」の意味・特徴の検討—」『実践女子短期大学紀要』27
- ⑪泉原省二（2007）『日本語類義表現使い分け辞典』研究社
- ⑫日本語記述文法研究会編（2008）『現代日本語文法 6 第 11 部 複文』くろしお出版
- ⑬田中寛（2010）『複合辞からみた日本語文法の研究』ひつじ書房
- ⑭ハディウトモ ドゥイ アンゴロ（2013）「近接関係の時間表現の研究—「とたん（に）」「やいなや」「はずみ（に／で）」「拍子に」を中心に—」『立教大学日本語研究』20

《表 1》は、上の①～⑭の先行研究における記述を〈同時性〉〈直後〉〈「に」への言及〉〈意外性〉〈意志性〉〈因果関係性〉〈主体〉〈(トタンがもつ) イメージ〉〈書き言葉的〉〈話し言葉的〉の 11 項目について、その特徴が有るとしているものに○、無いと明言しているものに×、言及がないものは空欄、直接的な記述はないがそのようなニュアンスが含まれると思われる微妙なものに△としている。カッコの中は、その先行研究本文での記述を引用した。

この表から気づくことを項目別にみていこう。

まず、時間的側面の記述の仕方であるが、年代によって変化しているようだ。『基礎日本語辞典』（以下『基礎』と略す）から中村（2005）までは、トタンの用法に「同時性」という言葉が見られるが、その後の奥村（2006）や『日本語類義表現使い分け辞典』（以下『類義』と略す）等では使われておらず、「（前件と後件の間が）瞬間的」というような表現になっている。さらに、直近の研究である『複合辞からみた日本語文法の研究』（以下『複合辞』と略す）やアンゴロ（2013）では、「前の動作が起こる直後に、別の動作が起こる」というような「直後」という表現に変わっている。これは、研究が進むにつれてトタンに「直後」の要素が含まれるということが問題になってきた結果ではないだろうか。「同時性」「直後」が並列するかの考察はここでは置くとし、トタンが「同時性」とも「直後」とも捉えられるという点は、用例の分析等を通して明らかにしなければならない。

次にトタン（二）の「に」についての言及である。14 の先行研究のうち、「に」について言及しているものは 5 本である。『基礎』『ジャマシイ』では、「「～。とたんに」の

《表1》トタンの諸特徴（先行研究より）

| | 同時性 | 直後 | 「に」への言及 | 意外性 | 意志性 | 因果関係 | 習慣性 | 主体 | イメージ | 書き言業的 | 話し言業的 |
|------|-----------|--------|----------------------------------|-----|-----------------------|---------------------|-----|---------------|------|-------|-------------|
| ①基礎 | ○（時を合わせて） | | ○（省略できない場合がある） | | | ○（偶然の一致の場合もある） | | | | | |
| ②表現 | ○ | ○ | | | | | | ○（同一主体、異なる主体） | | | |
| ③副詞 | ○ | | | ○ | | | | | ○ | | ○（ややくだけた表現） |
| ④500 | ○ | | | ○ | | ○ | | | | | |
| ⑤ジャ | | △（すぐ後） | ○（省略できない場合がある） | ○ | ×（意志性はない） | | | | | | |
| ⑥中里 | ○ | | | | | ○（偶然的事柄がくる場合もある） | | | | | |
| ⑦江 | | | | | ×（非意図的） | | | | | | |
| ⑧中村 | ○ | ○ | | | | ×（因果関係の有無にかかわらずない） | | | | | |
| ⑨村木 | | ○ | | | | | | | | | |
| ⑩奥村 | △（瞬間的） | | | | ×（話し手の意志的動作はない） | | | | | | |
| ⑪類義 | △（瞬間） | | ○（「に」を加えない方が場面展開は早い） | ○ | | | | | | ○ | ○ |
| ⑫現代 | △（瞬間） | | ○（「とたんに」という形で用いられることもある） | ○ | ×（「話し手の意志的な動きは現れにくい」） | | × | | | | |
| ⑬複合辞 | | ○ | ○（確定的な事象として認識され、原因理由的な背景にまで意味拡張） | ○ | × | ×（前件と後件の間に論理的関係はない） | × | | | | |
| ⑭アン | | ○ | | ○ | ×（意志的な場合は「やいなや」） | | | | | | |

場合には「「に」を省略できない」としている。確かに、「～。とたん」は本稿執筆者の内省による判断においてもあまり聞き慣れないが、なぜ省略できないのかという理由や説明はない。その後、動詞に続く「V-たとたん(に)」についてなのだが、『類義』では「「～に」を加えないほうが、場面展開は早い感じがする」とし、「に」が付属することで時間性に変化があることを指摘した。また『複合辞』では、「に」が付属すると「前後に何らかの必然性、確定的な事態を認める背景が介在」するとし、「に」が前後関係の意味的関連性に影響を与えるという立場をとっている¹⁾。このように、「に」のもつ効果については、時間性においても意味的関連性においても論じられており、用例を集めて詳しく分析する必要がある。

次に〈意外性〉と〈意志性〉であるが、この両者は言葉の上でも相反している。いずれの先行研究でもトタンは〈意外性〉を持つとしているものは多く、〈意志性〉をもっていると言及したものはなかった。例えば、『現代日本語文法6』（以下『現代』と略す）では〈意外性〉〈意志性〉のどちらも話題に挙げているが、「意外感や驚きを伴うような主節の事態の実現」と述べている一方で、「話し手の意志的な働きは現れにくい」としている。ほかの先行研究もそのような記述である。また、『ジャマシイ』で、「話し手の意志的な動作を表す表現」には「「とすぐに／やいなや」」が代わりに用いられるとしていることから、意志性の有無については「やいなや」と合わせてみていく必要がある。

因果関係については、『どんな時どう使う 日本語文型 500』（以下『500』と略す）で「前のことと後のことは、互いに関係があることが多い」とし、断定は避けているが、おおむね因果関係については認めていると判断できる。また『基礎』、中里(1998)は「因果関係がある場合」と「偶然の一致」との場合があるとして、前件後件の関連性の有無は関係ないと見なせる。中村(2005)もトタンの「消極的条件」ではあるが「因果関係の有無に関わらず使用可能」とし、同様の立場であることが分かる。一方『複合辞』では、トタンには意志的な内容が来ないことも相まって、「前件と後の間には論理的な関係もない」とし、因果関係はないという立場である。

〈習慣性〉は、『現代』と『複合辞』で記述があった。『現代』では、「未来や習慣的な事態も現れにくい」、『複合辞』では「習慣性ではなく」とし、いずれもそこで挙げている用例は「？」にしている²⁾。

〈イメージ〉については、『現代副詞用法辞典』（以下『副詞』と略す）でのみ記述がある。『副詞』では、「V-たとたん(に)」「V-た、そのとたんの」は「プラスマイナスのイメージはない」とし、「～や、とたんに」「～たらとたんに」は「ややマイナスイメージ」としている。これは用例を細かく分析しなくてはならないが、動詞をそのまま受けるか、間に接続助詞を置き、トタンの節が新しく始まるかの違いが関係しているだろうと考える。

〈書き言葉的〉〈話し言葉的〉という文体については、『副詞』『類義』で述べられてい

る。『類義』では「書き言葉であるが、話し言葉にも使われる」とする一方、『副詞』では「ややくだけた表現で、かたい文章中には登場しない」としている。本稿では、紙幅の都合上文体の差までは触れることができない。ただ、今回集めたトタンの用例が小説からの引用が多いことを鑑みると、「かたい文章中には登場しない」との記述は当たっているようにも思う。

以上のことから、先行研究に於いてトタンの用法は次のように考えられている。

- ・トタンでつながれる前件と後件は「同時性」とも「直後」とも捉えられる。
- ・「に」のもつ効果については、数は少ないが、時間的なことでも意味的なことについても論じられている。
- ・〈意外性〉はある。（よって〈意思性〉はない。）
- ・因果関係の有無は先行研究によって論が分かれている。
- ・〈習慣性〉をあらわす文には使われない。
- ・トタンのイメージはパターンによって異なるが、プラスよりはマイナスの方が強い。
- ・硬い文章には登場しないが、書き言葉にも話し言葉にも使われる。

3. 研究方法

本稿では、先行する辞書・論文での考察を参考にしつつ、典型的用例をもとに自己の内省を駆使しながら主に演繹的に分析することを中心として論じていく。分析する方法としては、それ以外にも、多くの用例（データベースやコーパス等）から帰納的に傾向を導き出す方法、条件を固定・限定してアンケート等の方法で母語話者の使用意識を調査する方法などが考えられる（アンケート調査については別稿で公表予定あり）。特に帰納的分析も今後報告する予定であるが、一方で、データの的に難しい課題も出てくる。例えば、文学作品等の一定の資料群では、今回取り上げる5パターンそれぞれの用例が均等均質に集まりにくいこと、反対にBCCWJのような巨大なコーパスになると、意味に関わる微妙な比較を全用例に対して行うことが容易でないこと（形態や接続などの観点なら機械的に可能であるが、意味となると結局1文ずつを読解して処理することになる）、1例毎に前件と後件とが表す時間的意味幅には無限とも言えるような微妙な組み合わせが発生し得るので、あまり巨大なデータでの意味的分類となると作業時間が必要なこと、各パターンの用法はかなり近接していて重なり合うこと、などがある。多量データによる帰納的意味比較は今後の課題となる。

さてまずは、先行研究での記載事項を整理し、語のパターンを区別しながら、実際の用例をもとに一つずつ考察していくことにする。

本稿で使用した用例は、先行研究で扱われているものを優先とし、その他は『現代日

本語書きことは均衡コーパス (BCCWJ)』『少納言』『青空文庫』で検索したものである。検索は、文字表記の差異による集計の誤りを防ぐため、「途端」「とたん」「瞬間」「しゅんかん」「や否や」「やいなや」のように、漢字とひらがなの両方の表記で行った（ただ、「なり」はひらがな表記しか確認されなかったため、検索もひらがな表記のみで行っている）。その中から、例えば「花子が好きだったと（、）たんじろう（丹次郎）は言った」のように、接続機能語のトタンの用例と認められないものは削除した。（「瞬間」「やいなや」「なり」についても同様である。）また、表現の置き換えによる作例は用例番号に「'」を付し、その都度示す。

なお、トタンについては今回の考察を補う意味で、アンケート調査を実施した（詳細は、安部清哉・三次佑果（2016 予定稿））。実際の母語話者の意識を探ることにより、実態に即した結果を得ることができ、かつ客観的なデータによる分析が可能となる。アンケートは、大学生約 50 名を対象に実施したもので、若年層の日本語ということになる。以下の考察でもその結果を一部考察の根拠として利用したことをお断りしておく。なお、調査内容は、

今回本稿で扱う全 5 パターンのトタンから 2 ペア毎に例文 7 つで比較し（計 10 ペアで、各例文 7 はすべて共通）、どちらのパターンの方が時間的間隔が短いと感じるかを選択させるものである。文脈的意味の相違は問わず、時間的間隔の長短に特化しての比較アンケートである。

参考まで、第 1 回調査の一部の 2 例文を以下に示す。

- (1) A ドアを開けたとたん、猫が飛び出してきた。
- B ドアを開けたとたんに、猫が飛び出してきた。
- (2) A 有名になったとたん、彼は横柄な態度をとるようになった。
- B 有名になったとたんに、彼は横柄な態度をとるようになった。

回答者には A と B の時間的間隔が短いと感じる方を選択してもらい、各ペア（ここでは「V-たとたん」と「V-たとたんに」）での各 7 例文において、選択する A・B の数に 5 対 2 以上の差があった回答語形の方を短いと判断し、4 対 3 は差が無いとして処理し、5 パターン（トタンの 5 形式）での相互の長短差を相対的に位置付けてみたものである。

4. トタンのパターンと用法

4-1. 諸研究で扱われたトタン

《表 2》に諸研究で挙げられている（用例も含む）トタンのパターンを○で示した。これらの相違については、中村（2005）で「に」の有無に触れているだけで、他では特に区別なく論じられているのが現状である。

《表2》トタンの表現パターン（先行研究より）

| | トタン基本パターン8 | | | | | | | |
|--------------------------|------------|-------------|------------|-------------|------------|-------------|--------------|---------------|
| | V-る とたん | V-る とたんに | V-た とたん | V-た とたんに | ～た。 とたん | ～た。 とたんに | ～た。その とたん | ～た。その とたんに |
| ①基礎日本語辞典 | | | ○ | ○ | | ○ | ○ | |
| ②日本語表現文型 | | | ○ | ○ | | | | |
| 松木（1992） | | | | ○ | | | | |
| 基礎日本語文法（1992） | | | ○ | | | | | |
| ④どんな時にどう使う 日本語表現文型500 | | | ○ | ○ | | | | |
| ⑤教師と学習者のための日本語文型辞典 | | | ○ | ○ | | ○ | ○ | ○ |
| ⑥中里 | | | ○ | ○ | | | | |
| ⑦江 | | | ○ | ○ | | | | |
| 田島（2001） | | ○ | | ○ | | ○ | ○ | |
| 中上級を教える人のための日本語文法～（2001） | | | ○ | ○ | | | | |
| ⑧中村 | | | ○ | ○ | | | | |
| ⑨村木 | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | | ○ | |
| ⑩奥村 | | | ○ | ○ | | | | |
| ⑪日本語類義表現使い分け辞典 | | | ○ | ○ | | | ○ | ○ |
| ⑫現代日本語文法6 | | | ○ | ○ | | | | |
| ⑬複合辞からみた日本語文法の研究 | | | ○ | ○ | | | | ○ |
| アンゴロ（2012） | ○ | ○ | | ○ | | | | |
| ⑭アンゴロ | ○ | ○ | ○ | ○ | | | | ○ |

| その他のトタンのパターン | | | | | | | | |
|--------------|--------------|----------------|---------------|-----------------|--------------|----------------|------------------|--|
| ～たら、 とたんに | ～ると、 とたんに | ～しよう とした途端に | ～しようと する途端 | ～しようと するとたんに | ～る。その 途端に | (体言)は その途端に | ～が(逆接)、 その途端に | 他 |
| ○ | | | | | | | | 途端の～ |
| | | | | | | | | |
| | | | | | | | | ～たとたんにだ |
| | | | | | | | | |
| | | | | | | | | |
| ○ | | | | | | | | |
| | | | | | | | | |
| | | | | | | | | |
| | | | | | ○ | ○ | ○ | ～る。途端に ／～る、途端 に／V-た途 端です／その 途端です |
| | | | | | | | | |
| | | | | | | | | |
| | ○ | ○ | ○ | ○ | | | | |
| | | | | | | | | |
| ○ | ○ | | | | | | | |
| | | | | | | | | |
| ○ | ○ | ○ | | | | | | ～た、そのと たんに／～し ようとしたと たん |
| | | | ○ | | ○ | ○ | ○ | 体言。この途 端に／～ると、 その途端に |
| | | ○ | | ○ | | | | V-るその途 端に／けると たんに |

4-2. 現代語のトタン6パターン

《表2》を整理し、「V-るとたん（に）」型の近代語までの2つを除外すると6パターンになる（《表3》参照）。「V-たとたん」「V-たとたんに」といった「に」の有無、次に「～.そのとたんに」「～.とたんに」といった「その」の有無、そして「V-たとたんに」「～.とたんに」といった動詞を直接受ける場合と文頭から始まる場合とを分析していく。

《表3》トタンの基本的表現パターン

| 品詞 | | | | 用例 |
|------|--------|---------|----------|---|
| 接続助詞 | V-たとたん | V-るとたん | するとたん | 我れながら酷く逆上て人心のないのにと覺束なく、氣は狂ひはせぬかと <u>立どまる途端</u> 、お力何処へ行くとして肩を打つ人あり。（樋口一葉『にぎりえ』） |
| | | | するとたんに | それが舞台へ掛る <u>途端</u> に、ふわふわと幕を落す。（泉鏡花『歌行灯』） |
| | | V-たとたん | したとたん | 看護婦さんが管を <u>さわったとたん</u> 、私の管からおしっこが噴水のようにバーッと出て、看護婦さんの顔に『顔面シャワー』（林雄司編『死ぬかと思った』） |
| | | | したとたんに | 共産主義を取り入れた <u>途端</u> に、国は貧乏になってダメになる。（阿川佐和子『阿川佐和子のこの人に会いたい』） |
| 副詞 | | ～.とたん | ～.とたん | 「狂いまわるような苦しみかたで、黄色い水をげぶげぶ吐きましてなあ。 <u>途端</u> 、がつくりとなったですけん」と云った。（井伏鱒二『黒い雨』） |
| | | | ～.とたんに | 和政我也是を下がらせると、にじり口になっている板を力任せに蹴った。 <u>とたんに</u> 肩を押さえてうずくまる。響いたらしい。駆け寄ると。（時海結『業多姫』） |
| 接続詞 | とたん | ～.そのとたん | ～.そのとたん | 思いきって、私も目をつぶってかじりついて <u>みた</u> 。 <u>そのとたん</u> 、私はものすごい勢いでむせて、口に入れた分を全部吹き飛ばしてしまった。（清水義範『私は作中の人物である』） |
| | | | ～.そのとたんに | （ニュースが）…インターネット上の、ニューヨーク・タイムズのページでも流された。 <u>その途端</u> に、さらに多くの海外メディアからも、取材依頼が舞い込み…（幸田真音『日本国債』） |

4-3. トタンのパターンごとの比較

4-3-1. 「に」の有無による相違について

4-3-1-1. 「V-たとたん」「V-たとたんに」の比較

まず初めに「に」の有無で異なる「V-たとたん」と「V-たとたんに」を比較する。「に」の有無について、『類義』では「「～に」を加えないほうが、場面転換は早い感じがする」と解説しているが客観的なデータは示されておらず、詳しくない。一方で『ジャマシイ』では、「に」の有無にかかわらず両者は同種のものとして、次のようにあげている。

- 1) ドアを開けたとたん、猫が飛び込んできた。（『ジャマシイ』）
- 2) 有名になったたとたんに、彼は横柄な態度をとるようになった。（『ジャマシイ』）

1)は、ドアを開けるのとほぼ同じタイミングで猫が飛び込んでくる場面で、トタンが選ばれている。しかし2)は、有名になって横柄な態度をとるようになることは、一定の時間的経過を必要とする出来事であるので「とたんに」が選ばれているようにも見える。

ただし、下記のように語形を入れ替えても違和感は大きくない。

1)′ ドアを開けたとたんに、猫が飛び込んできた。(作例)

2)′ 有名になったとたん、彼は横柄な態度をとるようになった。(作例)

したがって、「に」の有無を区別なく扱う『ジャマシイ』での語形選択は偶然かもしれない。単なる語形入れ替えによる比較は、元の表現とは印象が多少変化すると思われるものの、その受け取り方には個人差もあるだろう。(個人的には、2)′は2)よりも時間間隔が小さく、“有名になったと判断される時点で急に横柄な態度をとる”ような印象をもつ。)このような置き換えによる比較は印象が微妙で例文による差もある。ただ、このような「に」の有無による意味変化の傾向は他の実例でも見受けられる。

3) 頭を打ったとたん、ピットイナズマのように首筋に鋭い痛みが走ったのをまだ体が覚えていた。(椎名誠『ひるめしのもんだい』)

4) だが腕をつかんだとたん、大声を出された。すぐさま男性店員が飛んできた。(日明恩『鎮火報』)

5) ヨーロッパを巡る新婚旅行から帰ってきた途端に、新妻はさっさと会社をやめてしまったのである。(池澤夏樹『インパラは転ばない』：中里(1998))

6) 共産主義を取り入れた途端に、国は貧乏になってダメになる。(阿川佐和子『阿川佐和子のこの人に会いたい』：江(2000))

3) 4)は「V-たとたん」の用例、5) 6)は「に」が付いた「V-たとたんに」の用例である。1)と2)の比較でも見てきたように、3) 4)のような「に」が付属しない事例は、後件が前件に対してその場における即座の出来事である傾向が見られるのに対し、5) 6)のような「に」が付属する事例では、前件と後件の間にある程度の時間幅を持っている傾向が見られる(勿論、ほとんど同じような状況での使用例や時間幅がむしろ反対にも見える例も全くないわけではないが、これらの事例でその典型的相違の特徴を例示しておく)。

以上、提示したのは論文等の例文や一部の典型的実例ではあるが、「に」の有無による総体的差を指摘し得る。我々の分析から見ても、『類義』が指摘するのと同様に、「に」によって時間間隔の「長短」の差が生まれていると見なすことができる。

ちなみに、アンケート調査で「に」に有無についての同文比較を行い、時間間隔が短い方を答えてもらった。「V-たとたん」59%、「V-たとたんに」11%で、やはり「V-たとたんに」より「V-たとたん」の方が前件後件の時間幅が小さいという結果になった。('変わらない'の回答は30%あったが、「V-たとたん」の回答は過半数を占めている。)

4-3-1-2. 「～. そのとたん」「～. そのとたんに」の比較

次に「その」が付属した「～. そのとたん」と「～. そのとたんに」で同様に「に」の有無での相違を見る。

7) 思いきって、私も目をつぶってかじりついてみた。そのとたん、私はものすごい勢いでむせて、口に入れた分を全部吹き飛ばしてしまった。(清水義範『私は作中の人物である』)

8) (ニュースが) …インターネット上の、ニューヨーク・タイムズのページでも流された。その途端に、さらに多くの海外メディアからも、取材依頼が舞い込み… (幸田真音『日本国債』)

7)は、「かじりついてみた」すぐ後に「むせる」という前件の瞬間後件が起こるといいう場面が想像できる。一方で8)は、「インターネット上に流された」と同時に「取材依頼が舞い込む」というわけではないだろう。両者とも即時的な意味はあるが、やはり時間幅が大きい表現において「に」が付属しているように見える。

ちなみに、時間副詞には「すぐ」と「すぐに」、「先」と「先に」など「に」の有無を使い分けているものがある。「すぐ、来て」と「すぐに、来て」では受ける印象が違おう。このような事例にも同様に、「に」付属の有無による時間間隔の相違が現れていることがわかる。付属しない場合に比べて、「に」のある場合は時間間隔が大きくなると考えられる。

以下に同様の語形選択をしている実例を挙げる。

9) 床に倒れるブラッドを見て、アンジーが叫んだ。そのとたん、メインコンピュータルームの照明がスパークをあげて火を噴いた。(木村明広『リムーバー・ソウル』)

10) どこかでギャーッと不気味な鳥の聲がして、祐美の足はすくんだ。そのとたん、バサバサと熊笹のすれる音がして、一瞬のぞいたイノシシの顔! (浅野美和子『笑顔の法則』)

11) 「もし、私たちが、ことばの通じない外国に一人で取り残されたらどうなるだろうか。そのとたんに周囲の人々とのコミュニケーションが困難となり、自分の意思や簡単な要求を伝えること…」(江田裕介『障害児教育に生かす心理学』)

12) 「ごめん」禎蔵は戸の半分開いている玄関先に立って声を上げた。その途端に胸が波立ち、拳を握りしめたが、激しい怒りが込み上げてきて体が小刻みに震えた。(乙川優三郎『蔓の端々』)

9)は、叫ぶことと照明が火を噴くことが連続しており、10)も不気味な声によって足がすくんだと同時に熊笹のすれる音がしている。一方で、11)取り残されることと周囲の人々との意志疎通が困難になること、12)声をあげることと胸が波立つことは、前件後に後件が(9)、10)ほどには) 瞬時に起こることではない。これらでは後件の内容が

瞬時の変化・動作ではなく、ある程度の時間幅、段階性をもって推移するものであるからかもしれない。これらの比較事例に即して言えば、前二者が機械と動物の瞬時的反応の類であるのに対して、後二者では、人の認知・自覚・判断という（たまたまここでは人の判断の例ではあるものの）一定の過程を経るような時間的段階性を持つもの、というような差異である。

この2つのパターンでの全ての相違が、「に」の無い方が機械・動物で、「に」のある例が人間やあるいは社会構造のような抽象的でゆっくりと進展する事案である、という意味ではない。あくまで、相対的な相違を1つのわかりやすい典型的なニュアンスの差異としてここでは説明してみた、とご理解いただきたい。（これらでも前述の比較事例と同様、同じような使用例やむしろ反対にも見える例がないわけではないが、典型的特徴を例示したものである）。

この2つのパターンでのもう1つの相違の傾向として補足しておく、「に」が付く事例の方が前件と後件とでの出来事の因果関係を、何か論理的な文脈の中で説明しようという意図が感じられる構文で使われている傾向も若干認められるようである。これは「に」の無い方には因果関係や論理関係が「まったくない」という意味ではない。ただ、例えば、7)はむせる理由になっているので因果関係はあるが、ほとんど動物的反射行動と言える。9)は因果関係はない事例である。10)でも足がすくんだからイノシシが出たのではないだろう（鳥の声に驚いてイノシシが出た可能性はあるが、それを明瞭に述べる表現ではない）。一方、8)、11)、12)では（説明を略してもわかるように）前件が後件の原因になっていることは明確であり、しかも、その因果関係をあえて明確に述べようとしているような文脈展開になっているように読み取れないだろうか。そこには、格助詞「に」によって、格関係を、つまりは論理的関係性を明示する働きが影響しているのかもしれない。このような傾向の差も、相対的に認められそうであったので、念のため指摘しておく。

アンケート調査において、時間間隔の小さい方を回答してもらったところ、「～。そのとたん」72%、「～。そのとたんに」11%、「変わらない」17%という結果になった。したがって、「その」が付属する「～、そのとたん」「～、そのとたんに」の場合も「に」が付属する方が、時間間隔は大きくなると言える。

4-3-2. 「その」の有無による相違について

次に「その」の有無で異なる「～。そのとたんに」と「～。とたんに」を考える。『ジャマシイ』では、「～。そのとたんに」を「その直後に」、「～。とたんに」を「たちまち」と置き換え可能のように記載している。しかし、そこでの「その直後に」と「たちまち」の2語の言い換えに明確な意味の違いを見出すことが容易でないため、この説明だけでは両者がどの程度の時間差をもっているのか不明である（以下の例にも各々試しに入れ

てみていただきたい)。

- 13) 院長が、もう一度、彩子の肩に手をかけて、小さくうなずいた。そのとたんに彩子の肩から力が抜け、眼から涙がこぼれ落ちた。(志賀貢『女医彩子の事件カルテ』)

- 14) その場にへたってしまった。暑くなったのか、畳の方に行き、やがて横倒しに寝た。とたんに、宅配便屋さんの声がした。チャイムは、外してある。ビッキが無理に体を起こそうと…(出久根達郎『犬と歩けば』)

13)は、指示詞「その」が前文の内容を受け、それが直接の要因であることを示していて因果関係が明らかである。院長が綾子の肩に手をかけたから綾子の肩から力が抜けたと考えられ、確かに「その直後に」という意味合いが出る。一方、14)は直接的な関係を指す語もなく、前件の横倒しに寝たことと後件の宅配便屋が来たことの間には因果関係はなく、単なる時間的近接関係のみである。それゆえ、その分「唐突に」「ふいに」というニュアンスもより強く伴い得る。

このように、「～。そのとたんに」は「その」の指示性も働いて、前件と後件との内容的な直接的関係が強く示され、その分、単なる時間的關係だけでなくそれに付随して因果的連関「も」強く付加されるような事例が多くなっている傾向があるようである。それに対して、「～。とたんに」では、単なる時間的近接だけで、前件と後件とは、必ずしも因果的連関もなく、また、時間的な近接や変化でも「直接的な論理的脈絡でつながらない変化」、「唐突な変化」の場合においても、使われている事例が生じやすい傾向が見られる。以下にその他の用例を挙げてみる。

- 15) 入ってすぐ左側の小さな壁付洗面台によろよろとたどり着いた。そのとたんに堪えきれず、片手で冷たい白陶器の洗面台を握りしめ、力いっぱい咳き込んで吐いた。(五條瑛『プラチナ・ビーズ』)

- 16) …『なんとかならないか』ということで、つい最近二七〇円にしたんです。その途端に売れ出しましてね、これは失敗したかなと。(大森淳子『ああ、定年が待ち遠しい!』)

- 17) 鉄男は露なままの秋乃に視線をはしらす。とたんに秋乃は脚をきつくとじた。羞恥に頬を染める。(花村萬月『風転』)

- 18) …吠えはじめた。好奇心にかられた少年は、袋の口を縛っている紐をほどいてみた。とたんに、ぷんと異様な臭いが鼻を衝いたが、少年は気を奮い立たせて中を覗きこんだ。(草川隆『萩原朔太郎 殺人事件』)

15) 16)は「～。そのとたんに」の用例、17) 18)は「～。とたんに」の用例である。15)は、洗面台にたどり着き、着いた本人が安心したので「吐いた」のである。16)は価格を変えたことが「売れ出」したことに直接につながっている。

一方の17) 18)の例は、前件が「一定の」要因・原因を示しているという点では、14)

でのそれよりも前件後件の連関性も加わっている。むしろ、一般的な意味での因果関係はあると見ることもできる。しかし、そこでの関係の仕方が微妙に異なっていて、原因・理由の論理関係が言語表現上異なっていて弱くなっているという特徴（傾向）がある。

まず17)は、鉄男が秋乃の脚に視線を向けた「ので」、それを察した秋乃が「膝を閉じた」のだから因果的關係にはある。一方、それ以前に二人の間には一定の緊張感があり、「露わな」服装の秋子は既に男の視点を意識していて、視線が脚に向いたのはそれに追加された「1つのタイミング」程度、既に閉じていた脚に「強さ」を追加した程度のもつと言える。あるいは別の言い方で説明した方がわかりやすいかもしれない。脚をきつく閉じるのではなく、「膝と腿の間に両手を素早く置いた」でもよかった。露わな脚部に「視線を走らせた」ことが「脚」の動作の物理的動因にはなっていないのである。なお、17)では前件と後件で主体が異なっている。主体の異なりは、因果関係の距離感の薄まりを助長する。

18)は、袋の紐をほどいたから、中から漏れ上がってきたのだろうその臭気が、鼻を衝いたのであって、臭気が漏れた前件が、匂いがした後件の直接の理由ではある。しかし、「紐をほどいた」だけで匂いが必ず出てくるとは限らない。もちろん強い臭気だからすぐ立ちのぼったのである。しかし、「鼻を近づけた。とたんに」や「風が吹いてきた。とたんに」とは異なる差異が、同じ因果表現と言っても質的にそこにある、と言ったら多少は理解していただけようか。因果はあるが「表現の質が異なる」(17)も同様)と見られる（より多くの事例での解説は、紙幅の関係で機会を改めたい）。

そのことを、再び短く指摘しておけば、13) 15) 16)では、13)は彩子（前件では受け手側であるが前件の行為の受け手当人）、15)は同一人物、16)は同じ製品であるが、一方の14) 17) 18)では、前件と後件の主体が異なった主体で表現されている。多くの事例の中には、もちろん、それぞれ逆の事例が相当に混在してもいるのが実状なのではあるが、いま述べたような、同じ因果関係と言っても表現性の質的差異が一部にあるところにも、この2形式での相違の一端が現れていることを指摘しておきたい。

さて、つまり、「～。そのとたんに」は、指示語「その」の働きにより前文を内容的に受け止め、後件はその文脈を受けて論理的に述べられる形になりやすい。前件と後件とで客観的論理的关系を込めて表現したい文脈に使われやすいと考える。一方、「～。とたんに」では、文が切れた後に直接トタンが続き、指示詞もないため、より後件の変化に前件とは無関係な、意外性や驚きの印象、急激さを付加しやすい、というかたちでまとめておくことにしたい。

ちなみに、『副詞』には「～、とたんに」の用法を「ややマイナスよりのイメージの語」「話者のあきれの暗示」としている。文型は異なるが、この点は「～。とたんに」にも該当すると思われた。

アンケート調査で時間的間隔の小さい方を回答してもらったところ、「～。そのとた

んに」30%、「～.とたんに」43%、「変わらない」27%という結果になった。それぞれの数値が拮抗している。時間的間隔での相違は少なく、むしろ、それとは別の意味的關係（上述のように論理關係）での相違が大きいパターンと推定される。

4-3-3. 文末に接続か、文頭につくかについて

次に「V-たとたんに」と「～.とたんに」の比較を行う。「V-たとたんに」はトタンの用法の中で最も典型的なパターンとも言えるものであるが、一方の「～.とたんに」は辞書や先行研究でもほとんど取り上げられず、用例も挙げられていないパターンである（《表2》参照）。それぞれの用例は以下のとおりである。

- 19) これを母親は「よく頑張るわね」と褒めてくれた。ところが、結婚したたとたんに、それが許されなくなるのである。（山口宏『うかつな男としたたかな女の法律講座』）
- 20) だから、いちばん安いのでやってちょうだい」と、ケローツとしている。たとたんに私はむなしい気持ちになって黙り込んでしまった。（小林千登勢『されど道づれ嫁姑』）

19)「V-たとたんに」は動詞を直接受けているため、前件と後件は同じ場面（主体）の連続した変化であり、結婚を機に状況・条件が変化する段階的変化を表して使われている。一方20)「～.とたんに」は、前件が句点で切られるため後件が新たに始まっていることを強く印象付ける。文的連続性がないだけでなく、場面・主体の変化も伴って、予期・予想しないこと、意外なことが展開する（急に「むなしい気持ち」になる）傾向が強く（多く）現れている。言わば、前者が予想・推定可能な因果関係でも表し得るが、後者では「主体の意思によらない予想外・想定外の偶然的」（中里1998）事態の変化が、驚きやマイナスイメージ（『副詞』）を伴って使われる場合が多い傾向がある。以下に、同様の用法を持った用例を挙げる。

- 21) 『通勤快足』（レナウンの抗菌防臭加工靴下）が、ネーミングを改めたたとたんに、売れ行きが驚異的に伸びたことはあまりにも有名である。（星野匡『すぐ役に立つネーミングの本』）
 - 22) それにしても、きらわれてもいいやー、と思ったたとたんに友だちがふえたとは、なんだか不思議なことである。（有吉玉青『がんばらなくても大丈夫』）
 - 23) ベッドの中で文庫本の小説を読了したときには、午前一時をとくに回っていた。とたんに、実に意外なことが起きる。部屋のドアが、ノックされたのである。何か思いも寄らない（笹沢佐保『水木警部補の敗北』）
 - 24) 現金なものだと苦笑しながら、由香里は風呂場へ行き、裸になって湯殿に入った。途端に悲鳴を上げた。黒い影が顔をかすめて飛んだのだ。（高橋治『海の蝶』）
- 21) 22) は「V-たとたんに」、23) 24) は「～.とたんに」の用例である。21)「ネー

ミングを改める」→「売り上げが伸びる」、22)「きらわれてもいいやーと思う」(何らかの行動様式が変化)→「友だちがふえる」はそれぞれ前件と後件に時間的な幅があるが、前後の意味的関連性は強い。このときの時間は、数日から数か月を要する例であり時間的幅が比較的大きい。一方 23)「午前一時を回っている」(と認識したとき)→「ドアが、ノックされた」、24)「湯殿に入った」→「(黒い影が顔をかすめたので) 悲鳴を上げる」は、21) 22) に比べて時間幅は短く、前後の関連性は弱い。このときの時間は、数秒から数分程度と比較的短時間と考えられる。したがって、「～。とたんに」は、前件から短時間に後件が起こり、かつ前件と後件の意味的関連性が弱いため、話し手にとって驚きをもたらすものとも言える。この2パターンにおいてもほとんど類似する事例や逆に見える事例も現れるのであるが、1つの傾向として指摘できるようである。

アンケート調査で、時間間隔の小さい方を回答してもらったところ、「V-たとたんに」77%、「～。とたんに」9%、「変わらない」14%という結果になった。アンケート調査では「V-たとたんに」の方が時間幅は小さいと意識されている。ここで挙げた 19)～24) では、「V-たとたんに」は前件と後件の間に数日あると推定できる事例、一方、「～。とたんに」の前件後件間は数秒程度であると予想できる事例である。アンケート調査の結果が優先されると考えるので、上記6例での時間的傾向についてはこれらの例での偶然の結果と見られる。このことを考慮すると、「V-たとたんに」「～。とたんに」の相違は時間的間隔ではアンケート調査のように長短に差があるが、前件と後件との意味的関連性(因果関係がある事柄)にも重きが置かれて使い分けられている傾向が見られるようである。細部は今後の課題としたい。

4-4. トタンの用法のまとめ

- ・「に」が付属すると時間間隔が大きくなる。(例:「V-たとたん」より「V-たとたんに」の方が長い)
- ・「その」が付属すると前件と後件が、文脈的に直接関係するような用例が多い。
- ・「～。とたんに」は前件と後件の関連性(因果関係)が希薄になり、後件での驚きやマイナスイメージが大きい。

5. トタンとその類義表現との比較

5-1. 類義表現の種類

トタンとその類義表現を考える。《表4》は、トタンと類義表現の比較を行った先行研究で扱われていた表現の一覧である。いずれも時間的に短いものが選択されており、トタンの即時性を基に考察しているものであった。4で考察してきたように、トタンには様々なパターンがあり、また、そのパターンによって時間間隔に長短があり、同時性とも継起性とも捉えることができることが分かった。したがって今回は、この中から同

時性が強いとされる「瞬間」と継起性が強いとされる「やいなや」を取りあげ、トタンとの比較とそれぞれの位置づけを試みる。

《表 4》 先行研究が比較するトタンとの類義表現

| | 瞬間 (に) | やいなや | なり | が早い か | たび (に) | ついで (に) | 拍子 (に) | はずみ (に) | やささ | 最中 | さなか | おり | 際 | かと思 うと | のうちに く…… かないか | 同時に |
|------|-----------|------|----|----------|-----------|------------|-----------|------------|-----|----|-----|----|---|-----------|---------------------|-----|
| 中里 | | ○ | ○ | ○ | | | | | | | | | | | | ○ |
| 江 | ○ | ○ | ○ | | | | | | | | | | | | | |
| 中村 | | | ○ | | | | | | | | | | | | | |
| 村木 | | | | | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | | | |
| 奥村 | | ○ | | ○ | | | | | | | | | | ○ | ○ | |
| アンゴロ | | ○ | | | | | ○ | ○ | | | | | | | | |

5-2-1. 「瞬間」との比較

まずは「瞬間」との比較を行う。「瞬間」は、トタンと同様に「に」が付属する「瞬間に」や動詞の非過去形（ル形）に接続する「V-る瞬間」などさまざまなパターンが見受けられる。実際、「に」の有無については『複合辞』に「「瞬間に」はある程度、予期した事態も想定される」という記述がある一方で、『現代』では「瞬間」も「瞬間に」も「同じように用いられる」とされている。トタン同様、「に」の有無についての違いが明確でなく、議論の余地はある。しかし、本稿では辞書等で典型的に扱われている「V-た瞬間」のパターンに限って考察を行うこととする。その他のパターンについての用法やパターンごとの比較については今後の課題としたい。「V-た瞬間」とは以下のようなものを指す。

25) 実行キーを押した瞬間、突然パソコンの画面が消えた。（『複合辞』）

5-2-2. 「瞬間」の先行研究

『日国』では、「瞬間」を以下のように記載している。

〔名〕まぶたを動かす間。まばたきをするひま。ごく短い時間をいう。瞬時。刹那。同様に「主節の成立する時期がきわめて短い時間」（『現代』）、「前件と後件の間が間隔をほぼ置かずには起きることが重要」（江 2000）との記載からも分かるように、「瞬間」が時間的同時性の強い語であることは、どの資料にも共通している。では、トタンとはどのような違いがあるのだろうか。

『基礎』では、トタンを「そのことに引き続いて起こる突然の状況変化」としていたが、「瞬間」は前件と後件がほとんど数秒も無いような瞬時の現象であり（『基礎』では「ゼ

口秒の差」と表現する)、トタンのような「ある時を境にして急激に状況変化が現れる例は「瞬間」で表すことができない」としている。

『複合辞』でも、「瞬間」のは事態そのものの描写、というニュアンスをとまなう」としており、トタンがもつような「何らかの心情的、背景」はもっていないとしている。トタンには前件後件の関連性の有無も特徴としてあるが、「瞬間」にはそのようなものがなく、単に時間の短さを言っているようである。

『ジャマシイ』では、「ちょうどその時」の意味。(中略)話しことばでは「V-たとたん」が用いられる」としている。4の考察により、「V-たとたん」はトタンの中では同時性が強いパターンであると考えられる。しかし、『ジャマシイ』は「に」や「その」の有無の区別を明確にしていないため、「V-たとたん」と置き換え可能なような記載については疑問が残る。

5-2-3. 「V-た瞬間」の分析

実際に「V-た瞬間」の用例を見てみよう。

- 26) 水滴は落ちた瞬間ジュッと音を立てて蒸発する。(『基礎』)
- 27) アルコールの容器に、ひびが入っていたらしく、手をふれた瞬間、すみきった涼しさが、指のあいだにぱっと拡がった。(安部公房『砂の女』：江(2000))
- 28) 通路を曲がろうとした矢先の出来事だった。「あ!」誰かと正面衝突した瞬間、瑛は手にしていたホットドッグを強く握りしめてしまった。(夜月桔梗『恋の紳士協定』)

26)水滴が落ちることと音を立てて蒸発すること、27)容器に手をふれることと涼しさが指に拡がること、28)正面衝突することとホットドッグを強く握ってしまうことは、いずれも前件後件が極めて短い時間のうちに起きていることが推測できる。また、時間間隔が小さく出来事が連続していることから、前件後件の内容にも関連があることがわかる。

26)~28)をトタンに置き換えてみよう。ここでは、トタンの考察において最も同時性に近かった「V-たとたん」と比べる。

- 26)' 水滴は落ちたとたんジュッと音を立てて蒸発する。(作例)
- 27)' アルコールの容器に、ひびが入っていたらしく、手をふれたとたん、すみきった涼しさが、指のあいだにぱっと拡がった。(作例)
- 28)' 通路を曲がろうとした矢先の出来事だった。「あ!」誰かと正面衝突したとたん、瑛は手にしていたホットドッグを強く握りしめてしまった。(作例)

トタンに置き換えた26)'~28)'は非文とは言えないが、「瞬間」の場合とは異なる印象を与える。それはトタンが「瞬間」のような「瞬時に」(ゼロ秒差で)起きるような事象ではないからであろう。「V-たとたん」がトタンの中で同時性が強いパターンで

あると言っても、「瞬間」と比べるとそれはどちらかというと継起的である。「瞬間」はトタンに比して極めて短時間であり、かつ前件と後件の関連の有無は関係なく、前件とほぼ同時に後件が生じる時間的同時性という点こそが重要であると言える。したがって、そのような相違があるためトタンから「瞬間」への置き換えは不自然となる例が多い（同義とは言えない）。以下にトタンの用例を挙げる。

29) ためらいは、古くさくて重厚なエレベーターを前にした途端、完璧に消えた。

「このエレベーターも素敵…」（瀬川貴次『実録・カトレア寮の怪』）

29)' * ためらいは、古くさくて重厚なエレベーターを前にした瞬間、完璧に消えた。

「このエレベーターも素敵…」（作例）

30) 「いや…だ…っ！」必死で叫んだ途端、硬い床に引きずり倒された。ズボンを引き抜かれ、足を左右に広げられる。（パーバラ片桐『殉愛共犯者』）

30)' * 「いや…だ…っ！」必死で叫んだ瞬間、硬い床に引きずり倒された。ズボンを引き抜かれ、足を左右に広げられる。（作例）

31) …たばこの煙をはきだしたりするんです。ところが、その同じキャディがメンバーに付いたとたん、態度ががらっと変わって優しくなる。私は名門コースのサービスは参考にならないと…（野地秋嘉『サービスの天才たち』）

31)' * …たばこの煙をはきだしたりするんです。ところが、その同じキャディがメンバーに付いた瞬間、態度ががらっと変わって優しくなる。私は名門コースのサービスは参考にならないと…（作例）

5-2-4. 「V-た瞬間」の用法のまとめ

以上、「V-た瞬間」の用法をまとめると次のようになる。

- ・継起性ではなく同時性を表すと言えるもので、前件と後件が極めて瞬時に（「ゼロ秒差」）でおきる、前件に加えて後件が新たに生じるというような点に重きが置かれる。
- ・基本的に時間上のみでの接続機能が中心であるため、前件後件間の意味的関連性の有無は関係ない。

5-3-1. 「やいなや」との比較

次に「やいなや」を考察する。「やいなや」の用例とは以下のようなものを指す。

32) 解禁日が来るやいなや、待ち構えたように釣り人たちがどっと川に繰り出した。（『基礎』）

「やいなや」はル形に接続し、「に」や「その」が付属することはないため、トタンのようなさまざまなパターンはないと思われる。なお、後述する先行研究等では、接続助詞「や」が「やいなや」の省略の形とし、区別なく扱っているものもある。これらについては、全くの同義であるか用例を詳しく見て考察しなければならないが、本稿では「動

詞ル形」+「やいなや」の形のみを扱うことにする。

5-3-2. 「やいなや」の先行研究

『日国』では、「やいなや」を次のように述べている。

活用語の連体形を受け、ある動作が完了すると同時に、他のことが行われるさまを表わす。…と同時に。…とすぐに。ただちに。

この記述からは、「やいなや」は、前件完了後の時間的同時性であるという主張がうかがえる。

また、『現代』でも「従属節の事態が実現したのか、まだ実現していないかがはっきりしないほどすぐに主節の事態が実現すること」、『複合辞』で「瞬間性の生起を意図する典型的な表現の一つで、直前、直後が一体化した、ほぼ同時的な状況」とあり、「やいなや」は前件と後件がほぼ同時に実現するさまを表すといえる。

一方で、森山（1984）の「同時的意味を含むかどうか微妙である。（中略）前件の方がわずかでも早いと言える」がある。この記述は実際に森山が高校生に行った調査をもとにしている。また、『500』の「「～が起こった直後に後のことが起こる」と言いたい時に使う」、『ジャマシイ』の「ひとつの動作に続いてすぐに次のことが行われる様子を表す」という記述も注目したい。これらは、前件の後に後件が起きているという時間的継起性を示唆している。解釈が異なっているのは、前件の事態が完了しているのか、まだ継続しているのか、未完了のうちに後件が発生しているのかという点であり、その点も課題であることがわかる。

以上は、「やいなや」の時間的側面のみを考察したものであるが、先行研究の中には意味的側面からアプローチしているものもある。『類義』では、トタンが予想外の展開に使われるのに対し、「やいなや」は「「予想外」といったもののさえ感じさせない」としている。一方『500』では、「後のことは前のことに反応して起こる予想外の出来事が多い」とし、両者で相反している。中里（1998）は「因果関係ではないが、何らかの関連性がある」としている。また、黄（1984）は、「やいなや」を「が早いか」と同グループとしてあつかっているが、「前件と後件が因果関係にあるといったような関連性を持つ文にも使われるし（中略）前件と後件の関連性があまりない文に使われる」としていたり、江（2000）は「後件が意図的、または非意図的な内容を表す」としていたりして、前件後件の因果関係や意図性の有無は無関係と見ている。

このように、「やいなや」は同時性なのか継起性なのか、また前件と後件の関連性の議論が分かれている中で、『基礎』『表現』は以上の資料とは異なった見方をもっている。それは、「後件の行為や事態が前件の成立を時間的に追いかけるようにやってくるという意識」である。「追いかける」という表現から、どちらかという継起性かと思われるが、単純に時間間隔が短いというわけではないようである。このことを『基礎』では

「待ち構えの姿勢」としている。

5-3-3. 「やいなや」の分析

実際に用例を検討してみよう。

33) 席に着くやいなや、裁判長は開廷の宣言をした。(『基礎』)

34) 開店のドアが開くや否や、客はなだれのように押し寄せた。(『ジャマシイ』)

35) 彼らはそのための計画を日本に進駐する前からつくっており、そして日本に進駐してくるやいなや、その計画どおりに日本の非軍事化と民主化をおしすすめていった。(吉田茂『激動の百年史』：『複合辞』)

まず前件と後件の時間的間隔を中心に考察する。

33)は前件後件ともに「裁判長」が主体であり、席について(完了)すぐ開廷の宣言をしたことが読み取れる。『現代』で前件が「事態が実現したのか、まだ実現していないかがはっきりしない」ほどすぐに後件が起きるとしていたが、裁判の開廷宣言が裁判長が席に着かないまま始まることはないだろう。裁判長が席について長い時間を置かずに開廷すると判断すべきだ。34)はどうだろうか。この用例からでは「ドアが開く」という行為が一体どの状態をもって言っているのかが分からない。「開く」というのはほんの数cmでもそうであると言えるし、開けきった状態を「開く」という場合もある。したがって、先の『現代』の記述にならうと前者は「開いたか開かないかの状態」、後者は「開けきったか開けきってないかの状態」となる。ただ35)の場合だと、大勢の客が入って来られるくらいにドアを「開け」なければ客は「押し寄せる」ことはできない。したがって、本稿執筆者としては後者の状態を指しているのではないかと考える。つまり34)は「ドアが開く」という事態・動きは完了していて、開ききらない状態のとき既に「客が押し寄せてきた」となる。35)は前件動詞が「進駐してくる」とある。33)と同様で、日本に来て(留まる支度を整えて)政治をする体制になって初めて「進駐」と言えるのであって、「するかしないかはっきりしない」という解釈はできない。そのような前件の行為が達成(完了)されて後件に動作が移る。

このようなことから、「やいなや」は前件の行為や状態が完了してから後件の行為が起きると言える。「瞬間」のような前件と後件が「瞬時に」「ゼロ秒差」で起きるものではないので、同時性ではなく継起性というべき性質が強いと判断できる。

次に前件と後件の意味的関連性を中心に考察したい。33)～35)の用例を再度前件と後件の内容に注目して見てみよう。

33)「席に着く」→「開廷を宣言する」は、一般的な自然な流れと言える。時間的間隔で述べたことの繰り返しになるが、前件の完了を待って後件が起きていると捉えられる。34)「ドアが開く」→「客がなだれのように押し寄せる」は、33)のように一般的とは言えないが、もし話し手に開店を待つ大勢の客が見えているならば、それは予想内の

出来事であると考えられる。35)は、「計画を日本に進駐する前からつくっており」が理由になって、「進駐する」→「計画どおり」にするという流れが出来上がる。前件で主体者「彼ら」は、計画を立てながら「進駐する」という状態になることを待っていて、ようやくそれが完了して後件で計画を「おしすすめる」ことができる。

このように、前件後件の内容は関連しており、後件の行為のために前件の行為が完了することを待ち望んでいるようにも捉えられる。これは『基礎』で述べられていた「待ち構えの姿勢」に相当するものと思われる。この「待ち構え」性に着目し、他の用例もみてみよう。

36) 大阪の会計コンサルティング会社に勤務する T さん (53) は、妻が携帯電話を閉じるやいなや、待っていたとばかりに声をかけた。(2010 年 10 月 2 日朝日新聞：アングロ (2013))

37) 「現場へ回って下さい！」と久保は運転手に怒鳴り、手帳の白紙のページを開くやいなや、そこに日付と時刻を記して、新たな現場に向かう準備を整えていた。(高村薫『レディ・ジョーカー 下巻』)

38) …長いんだもん！用具当番、遅れちゃう、遅れちゃう！」担任の長い長い HR が終わるやいなや、あたしは、教室を飛び出した！今日、あたしは、一年生の一人と、が部の用具当番に…(神崎あおい『いつだって今が始まり』)

36)は「待っていたとばかりに」という言葉が強調させているように、夫はずっと妻と話したいと思っていた。妻が携帯電話を閉じるのを待って、話を始めた。37)も白紙のページを開かなければ日付と時刻を記すことができない。つまり、ここで主体は新しい現場に行くために早く日付と時刻を記したいのである。だが、そのためには手帳のページが開かれることを待つ事が必要なのだ。38)でも主体は用具当番に遅れないように早く教室を飛び出したい。しかし、担任の HR がなかなか終わらない。主体は HR が終わるのを待って、ようやく教室を飛び出せるのである。

このように、後件の動作を行うために前件の行為を待つのだが、待っているがために後件がその動作を「意図・目的をもってできるだけ早く行っていく・行おうとする」ことが表されている場合に多く使われる傾向が強い。上記の『基礎』の「追いかける」を「意図的・目的」と再解釈する方がより適切かと思われる。後件が前件を「待ち構え」での「意図性・目的性」は、必然的に「関連性がある」(中里 1998) 事柄であろうし、「前のことに反応して起こる」(『500』)とも見えるであろう(但し、「予想外」ではない)。(『基礎』を受けたと思われる中里 (1998) の「前件の成立を待ち兼ねるようにして後件を急ぐ印象を与え、関連する一連の事象を緊張感をもってテンポ良く表現する場合に使う」でも「待ち構え」という特徴を迫認している。)

これに対してトタンは時間性が中心で、待ち構えや意図性は基本的にない。「やいなや」のこれらの特徴は次のような作例と思われるものでは希薄である。36)~38)で見て

きたように実例では顕著な傾向であった。ゆえに「やいなや」の作例やトタンとの置き直しでの可否検討は適当ではない。次に作例なのか、やや違和感があると思われるものをあげる。

39) ? 書面に目を通すやいなや、彼の顔色はさっと変わった。(『基礎』)

40) ? その薬を飲むやいなや、急に眠気がおそってきた。(『ジャマシイ』)

41) ? 飛行機が離陸するや否や、爆発した。(作例：江 (2000))

5-3-4. 「やいなや」の用法のまとめ

以上、「やいなや」の用法をまとめると次のようになる。

- ・ 前件の完了を待って後件が起こるという継起的なものである。
- ・ 後件が意図性・目的性をもって展開するため、前件を待ち構えているという「待ち構え」性に特徴がある。

6. 総括

本稿では、時間的近接関係をあらわす接続機能語であるトタンとその類義表現の比較を行ってきた。トタンはさまざまなパターンがあるにもかかわらず、従来の研究では、それらの違いについての詳しい考察やパターンごとの類義表現との比較が行われてこなかった。本稿ではトタンのパターンを整理し、それぞれの特徴を明らかにするとともに、トタンのパターンを1つに固定して類義表現との比較を行った。

改めてトタン、「瞬間」「やいなや」のそれぞれ用法の特徴を確認する。

トタンの用法は、次のようである。

- (1) 「に」が付属すると前件と後件での時間間隔が大きくなる。
- (2) 「その」が付属すると前件と後件が、文脈的に直接関係するような用例が多い。
- (3) 「～とたんに」は前件と後件の関連性（因果関係）が希薄になり、後件での驚きやマイナスイメージが大きい。

「瞬間」の用法は、次のようである。

- (1) 継起性ではなく同時性を表すと言えるもので、前件と後件が瞬時に（ゼロ秒差で）おきる、前件に加えて後件が新たに生じるというような点に重きが置かれる。
- (2) 基本的に時間上のみでの接続機能が中心であるため、前件後件間の意味的関連性の有無は無関係である。

「やいなや」の用法は、次のようである。

- (1) 前件の完了を待って後件が起こるという継起的なものである。
- (2) 後件が意図性・目的性をもって展開するため、前件を待ち構えているという「待ち構え」性に特徴がある。

トタンは本来、時間の短さを表す語であるが、パターンによつての時間幅や前件後件の意味関連に違いが見られた。「V-たとたんに」のように「に」が付属すると、付属しない「V-たとたん」よりも時間幅が生じる。また「～。そのとたん」のように前件を指示する「その」が付属すると、前件後件の内容が直接関連するようなものが多くなる。そして「～。とたんに」と「V-たとたん」のように文頭での副詞用法と文節末での接続助詞的用法では前件後件の関連の印象に相違がある。このようにトタンがさまざまなパターンを持ったことで、トタン自体が持つ時間間隔が広がったり、因果関係や文頭ゆえの驚きの意味が生じたりするようになった。トタンは、時間の長さだけでなく文脈的因果関係の意味も併せ持つようになったのだ。このようなことから、時間的意味が中心の「瞬間」とも、文脈関連性も含意して表現する「やいなや」とも、類義表現関係をもつ語になったと言えるのではないだろうか。

今回は取り上げることができなかったが、先行研究等では、時間的近接関係をあらわす語として、他にも「同時に」「おり（折）」「際」「さなか」「なり」「はずみ」「拍子」などがトタンの類義語として比較されている。これらについては、まだ詳細な意味分析や用例検討ができていないため、具体的な用法を述べることはできない。しかし、「瞬間」のような時間的意味に重点が置かれている類義表現としては、「同時に」「おり」「際」「さなか」等があり、「やいなや」のような前件と後件の意味的関連性をも含むものに「なり」「はずみ」「拍子」等としてグループ分けをすることができると考える。時間的意味を重点に置いた前者をいま仮にⅠ類（純短時間表現系）とするならば、意味的関連性を含む後者はⅡ類（前後関連表現系）とも言えるのではないだろうか。また、いずれの性質をも持つトタンは、Ⅲ類（時間関連両性表現）ということになるだろうか（《図1》参照）。体系化という点では、水谷（1964）以降、松木（1992）工藤（1992）『複合辞』でも試されているが、それらは時間の観点からのみのものであり、このような時間と前件後件の意味関連から体系化しているものは管見の限り見られない。

《図1》時間的近接関係表現の分類

| Ⅰ類（純短時間表現系） 瞬間／同時に／おり／際／さなか | Ⅱ類（前後関連表現系） やいなや／なり／はずみ／拍子 |
|--------------------------------|-------------------------------|
| Ⅲ類（時間関連両性表現） トタンの各パターン | |

時間的近接関係表現は多々あるが、このようにいくつかの基本的観点から系統的に分類して分析を進めることによって、より体系的な把握が可能となり、各表現の使い分けもさらに明確にできるだろう。

【注】

- 1) ここでは、「息子は家に帰ったとたんに、パソコンに向かっている」と「急に立ち上がったとたん、眩暈がした」を比較して、トタンは「一回性」であるがトタンニは「習慣性を意図」していると述べている。
- 2) 『現代』では「息子はいつも家に帰ったとたんに部屋に入る」、『複合辞』では「ご飯を食べたとたん、眠くなった」を挙げ、どちらもトタンは習慣的な場面では用いないとしている。
- 3) アンケート調査は、ご指導くださった安部清哉教授がご自身の問題設定（複合機能辞研究）に基づき、本稿執筆者が収集した用例を利用して調査票を作成し、先生の授業時間内に収集したものである。（第1回調査は日本語学講義ⅠB、日本語学講義Ⅱ、日本語学演習の履修学生に行い、第2回調査は平成27年度学習院大学国語国文学会秋季大会にて出席院生・学生に対して行われた。回答の集計は三次が担当した。）

【参考文献】

- 泉原省二（2007）『日本語類義表現使い分け辞典』研究社
- 奥村大志（2006）「時を表す機能語——「たとたんに」「かと思うと」「やいなや」「～が～ないかのうちに」「が早いか」の意味・特徴の検討——」『実践女子短期大学紀要』27
- 工藤真由美（1992）「現代日本語の時間の従属複文」『横浜国立大学人文紀要 第二類語学・文学』39
- グループ・ジャマシ編（1998）『教師と学習者のための日本語文型辞典』くろしお出版
- 江雯薰（2000）「「～瞬間（ニ）」、「～途端（ニ）」、「～ヤ（否ヤ）」、「～ナリ」——その共通点と相違点について——」『岡山大学大学院文化科学研究科紀要』9
- 黄麗華（1984）「「～や否や」「～が早いか」「～し（た）かと思うと」「～か…ないかのうちに」「～か…ないかに」」『日本語教育研究論纂』3
- 白川博之監修（2001）『中上級を教える人のための日本語ハンドブック』スリーエーネットワーク
- 田島優（2001）「「〈ル形〉＋途端」から「〈タ形〉＋途端」へ」『説林』49
- 田中寛（2010）『複合辞からみた日本語文法の研究』ひつじ書房
- 友松悦子・宮本淳・和栗雅子（1996）『どんな時どう使う 日本語表現文型500』アルク
- 中里理子（1998）「時間的接関係を示す接続表現について——「やいなや」「とたんに」を中心に——」『学校法人佐藤栄学園埼玉短期大学研究紀要』7

中村重穂（2005）「「～なり」と「～たとたん」に関する一考察——意味論的観点から——」『北海道大学留学生センター紀要』9

日本語記述文法研究会編（2008）『現代日本語文法 6 第 11 部 複文』くろしお出版
 ハデイウトモ ドゥイ アンゴロ（2012）「時間的近接関係を表わす接続表現の研究——明治・大正期の「とたん」の形態と意義に——」『立教大学日本語研究』19
 ハデイウトモ ドゥイ アンゴロ（2013）「近接関係の時間表現の研究——「とたん（に）」「やいなや」「はずみ（に／で）」「拍子に」を中心に——」『立教大学日本語研究』20

飛田良文・浅田秀子（1994）『現代副詞用法辞典』東京堂出版

益岡隆志・田窪行則（1992）『基礎日本語文法 改訂版』くろしお出版

松木正恵（1992）「複合接続助詞の特質」『早稲田大学大学院文学研究科紀要別冊 文学・芸術編』18

村木新次郎（2005）「〈とき〉をあらわす従属接続詞——「途端（に）」「拍子に」「やさき（に）」などを例として——」『同志社女子大学学術研究年報』56

水谷修（1964）「～やいなや・～が早いか・～とともに」『口語文法講座 3 揺れている文法』明治書院

三次佑果（2016.1.12 提出）『近現代語における時間的関係を表す接続機能語の研究——「とたん」の用法を中心に「瞬間」「やいなや」「なり」と比較して——』学習院大学大学院人文科学研究科、修士論文（指導・安部清哉教授）

森田良行（1989）『基礎日本語辞典』角川書店

森田良行・松木正恵（1989）『日本語表現文型』アルク

森山卓郎（1984）「～するやいなや／～するがはやいか」『日本語学』10-3

【付記】 本稿は、次の口頭発表を経てまとめた三次の修士論文の一部をもとにし、その一部について、提出後に安部清哉教授のご助言を受けて追記しつつまとめなおしたものである。

○三次佑果（2015. 11. 7）「時間的近接関係をあらわす接続機能語——「とたん」の用法を中心に——」平成 27 年度学習院大学国語国文学会秋季大会、於：学習院大学西 5 号館 201 教室

○修士論文：三次佑果（2016. 1. 12 提出）『近現代語における時間的関係を表す接続機能語の研究——「とたん」の用法を中心に「瞬間」「やいなや」「なり」と比較して——』学習院大学大学院（指導・安部清哉教授）

（みつぎ・ゆか 博士前期課程）